

茶 羅 仏 だ よ り

20号

農事組合法人金戸営農組合

平成24年2月19日に農事組合法人「金戸営農組合」の設立総会が開催された。

政府は過疎化、高齢化の進展や基幹的農業従事者の減少に対応すべく地域ぐるみで営農を展開する共同利用型・作業受託型から協業経営型へ、さらに任意組織から法人へと地域農業の担い手としての集落営農組織の育成を推進していた。

金戸は平成9年8月に協業経営型組織である「金戸営農組合」を設立し、たい肥等を使った土づくりと化学肥料・化学農薬の使用の低減を一体的に行うエコファーマー認定を取得し、特別栽培米の作付など環境に優しい農業推進を行っていた。

さらに今後のより一層の生産性を高め経営体制を強化し、次世代に繋ぐ農業生産法人となること目指すべく「農事組合法人金戸営農組合」が誕生した。

会員は44名で代表理事に品川正雄が就任した。経営面積は約42㌦で栽培作物は水稲・大豆である。



圃場整備事業

戦後の昭和22年から昭和25年にかけて農地改革が行われ、農村の地主小作制度は崩壊した。小作人が安い価格で農地を手に入れて自作農が大幅に増えたことは意義有ることであったが、経済的・経営的な見地からみれば大規模農業の細分化に過ぎず、農業経営が著しく非能率的なものに停滞することになった。その後政府も農家も細分化された農業経営にこだわり続けたので、日本の米作農家は国際的競争力を失い、政府は毎年莫大な税金の投入により保護せざるを得なくなった。

金戸は経営体制と効率を高めるため昭和46年から53年にかけて本所は「城端西部地区圃場整備事業」で、また昭和45年から58年にかけて中地山が「県営農用地開発事業立野ヶ原地区」で圃場整備事業を行った。それにより1枚の水田面積が3㌦程度から標準30㌦の大型圃場となった。

圃場整備は狭隘な農道や用排水路が、碁盤の目のように配置され大型機械が可能となった。それは耕運機からトラクターへ、稲刈りはバインダーからコンバインとなる歩く農作業から乗る農作業となり、大幅な労力節減が出来るようになった。

しかし高能率作業により農作業時間が短縮するに伴い、農家の兼業化に拍車をかけるようになった。兼業は日曜祭日の農作業となり共同利用の農機具も個人所有となり、個々の農家は赤字を農外収入での補填が常態化するようになった。

金戸のはるか昔の遠祖たち～縄文時代～

立野ヶ原遺跡群

中地山・経塚野を含む立野ヶ原台地に「立野ヶ原遺跡群」と呼ぶ旧石器時代の富山県でも最古級の遺跡群がある。狩猟や採集をしながら自然のサイクルにあわせて移動していたので住居跡が出る事はまれである。遺物には刃先だけが磨いてある局部磨製石斧や、長さ2～3センチの小型ですづまりな形が特徴の「立野ヶ原型ナイフ」が多く出土している。



立野ヶ原型ナイフ

西原遺跡

縄文時代は約1万2千年～1万3千年前に始まり約1万年続いた。縄文時代は温暖化したので食糧源も豊富となり、人は食糧の貯蔵や煮炊きをするようになって定住し、ムラを形成するようになった。その縄文人の遺跡が現在も金戸の示野新や屋敷田の地中に残っている。明治末期に立野ヶ原陸軍演習地増設にともない西原村から移住した住民が、地盛をした際に土器片などを発見したことから遺跡の調査が始まった。大正14年11月25日から城端小学校訓導であった松田光一（三郎右衛門）らの発掘調査で、縄文土器・石器などが多数出土した。大正14年の発掘時は地名から示野遺跡と云ったが、昭和34年の『城端町史』には地域名から西原遺跡と呼ぶようになった。遺跡は金戸・千福・野口の広範囲におよび西原に限定されないのので、往古からの呼び名である示野遺跡がふさわしいと思われる。



昭和48～9年に及ぶ第1・2次発掘調査において、県道城端駅野口線の東側（屋敷田辺り）と西側（示野新）に住居

跡11棟が確認された。その中の屋敷田辺りの2区第5号住居跡はこの調査の唯一の完掘住居跡である。縄文時代の中期（約5500～4500年前）に金戸の屋敷田や示野新に縄文人の営みがあったことに思いを巡らすに悠久の歴史を感じざるをえない。

金戸経塚

往古から南山田保育所西側に経塚があったが、昭和49年の基盤整備で無くなった。明治37年の立野ヶ原演習場地図や西原遺跡の発掘調査の附近図にも記るされている。

経塚とは経典が土中に埋納されたもので、平安時代に浄土思想が普及し、末法の世が訪れるという思想から経典を後代に残そうとした信仰形態であり、後世には供養塔の意味で築かれるようになった。金戸の経塚は古老によれば家畜の埋葬場所であったと聞いているので畜魂供養として築かれたやも、また字の記した扁平な小石があったとも聞くので、経典の一文字を書きし納めた礫石経塚やもしれない。



金戸の経塚